



メスガ○サキユバスをわからせ

エロバトルでハーレム作る話



エロバトルン文庫



登場ヒロイン1



ティア

B73W52H78

人間と魔物のハーフ。
いつまでも反省しない。
メスガキサキュバス魔王。

ルシア

B102W62H98

幼なじみの聖女。
強欲で性格悪い。
おっぱいがデカイ。





登場ヒロイン2

マナ

B87W56H80

七大魔将のサキュバス。
面倒見のいいメイド。
ちょっと抜けてる。

クロエ

B98W68H97

七大魔将のサキュバス。
参謀で幻術を使う。
陰キャで中二病。



フェリス

B96W59H98

七大魔将のサキュバス。
武闘派で豪快。
乙女な部分もアリ。



登場ヒロイン3

シーア

B100W63H99

暴君の女王様。
百合の女王様。
性欲の女王様。

ヴィオラ

B86W55H87

わがまま貴族。
残念なJK思考。
女王のお気に入り。



シルキー

B77W54H82

わがまま貴族。
傲慢なちっぱい。
女王のお気に入り。



メスガキサキュバスをわからせ、エロバトルでハーレムを作る話

1. メスガキサキュバスで童貞喪失！マンコには勝てなかったよ

「は一はあー♥♥♥ざちんぽのくせにい♥♥♥ちょっと優しくしてあげたら使えると思ったのに……これじゃあたしのほうが♥♥♥あああ♥♥♥♥♥賢者さまのちんぽしゅごいいいい♥♥♥♥♥」

「残念だったねティア！ぼくもたくさんのサキュバスちゃんたちと経験してきたのさ！初めてのときとは違うんだよ！」

「うう……そんな……はじめてあったときはかわいい童貞だったのに♥♥♥いつの間にかこんなヤリチン賢者になってるなんて思わなかったあ！」

小さい体をのけぞらせ、かわいい羽をパタパタ揺らし、ぽかぽかとぼくのひざを叩くサキュバスの魔王ティア。

「ばかあ！アスミおにいちゃんのばかあ！くそざこキモオタのくせにい！なにほかのサキュバスをわからせてるのよお！」

酸欠になったせいか本音がダダ漏れているメスガキ魔王の腰を掴み軽々と持ち上げて見る。

「まだ反省してないようだねティアちゃん？」

「あ……」

ようやく我に返るティア。

真下でマンコに狙いを定めているフル勃起ガチちんぽに叫びを上げるの
だった。

「や、やだああ！ 待って！ おにいちゃん！ 反省した！ 反省したからああああ
ああああああ！！！」

「そのいやらしい口でなに言っても信用できないんだよ！ 身体でわからせて
やる！ メスガキがあ！」

そのまま、腰を落とす！

ずぶううううううううう♥♥♥♥♥♥♥♥

「きゃああああああああ♥♥♥ティアこんなに感じちゃうのはじめてえええええ
♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

オスのちんぽをくわえ込むためにできているサキュバスマンコを容赦なくえぐ
り子宮の奥にカリ首が突入した！

「おほおおおおおお♥♥♥子宮まで一気にきたああああああああ♥♥♥」

犯す！ ロリ魔王を容赦なく犯す！

「はうううううう♥♥♥♥♥♥♥♥これがああ♥♥♥♥♥♥♥賢者のちからああああ♥♥♥」

喘ぎながらも魔王のマンコはちんぽにまとわりつき、必死に射精させようと
抗ってくる！

「無駄だよ！ 負けを認めるんだ！ ティア！」

メスガキ魔王をわからせるためにちんぽを何度も子宮に突き立てる！

「あ！ あああ！ ああああああ！ しぎゅううノックされちゃってりゅううう♥♥♥」

じゅぼじゅぼじゅぼ♥♥♥

これは賢者であるぼく、『アスミ・グラデシア』がメスガキ魔王の『ティア』と共に反逆するサキュバスをわからせ、ぼくを陥れた聖女と美少女貴族たちに復讐する物語。

～～数ヶ月前、エデン国～～

ぼくこと『アスミ・グラデシア』は実家からの長い道のりを終えてようやく壮観なエデン国の王都の門をくぐる。

「久しぶりの王都だなあ」

王都の街並みは以前来た時よりもはるかに活気にあふれていた。

セクシーでおっぱいがこぼれおちそうなビキニアーマー姿の女性冒険者や、魅惑的なスケスケローブをまとった商人さん。

愛らしい乳袋をたずさえたメイド服姿の子、さらにスカートがギリギリまで短いJK風のファッションまで！

王都にはかわいい女の子がたくさんいるうえに、流行している服も現代風にそしてちょっと……いやかなりエッチにアレンジがされていて実に華やかだ！

中央通りも少し前までの、さびれた雰囲気かうそのように、各国の旅行者が王都にある数々の名物店に列をなしていた。

行列のできている店には『ラーメン』とか『とんかつ』さらには『メイド喫茶』などの文字が並ぶ。

「うーんラーメンのこの香りなつかしいなあ。王都では鶏ガラスープが流行っているとみた！」

異世界の雰囲気をぶち壊したが、どうしても、ぼく自身がもう一度食べたかったのだから仕方がない。

転生者であるぼくが、前世の知識をフル活用して自分の欲望のままに、異文化コミュニケーションをした結果である。

エデン国のシーア女王や、そのお気に入りの美少女貴族のわがままと贅沢で、まずい事になっている財政を立て直したのだ。

その功績により実家グラデシアの肩書は下賤な田舎者の男爵家から、慈愛ある大富豪の辺境伯に変わっていた。

無駄遣いした貴族たちのほとんどは、ぼくに借金をしているため頭が上がらない状態だ。

この国でのアスミ・グラデシアの地位は盤石といってもいいかもしれない。

あとは家督を継いだうるさい兄がいる実家から飛びだして可愛い女の子との出会いを求める旅をしよう！と思っていたのだけど……

左手にある英雄の証である、賢者の紋章を見ながらため息がでる。

「はあ……めんどくさい……」

復活した魔王を倒す四英雄の一人に選ばれてしまったのだ。

成人の日に現れたコレのおかげでシーア女王に呼び出されて王都に来たというわけだ。

「ん？なんか人混みができてる？」

王都の中心にあるお城へ向かう商業区の狭い路地で、豪華な馬車を取り囲むように人が大勢集まっていた。

「なんだろう？」

そこには黒く長い髪を肩までのばしたエルフのような長い耳を持つ、半魔族の少女が人間の親子をかばうように立っていた。

半魔族は魔物と人間の混血といわれている呪われた種族のことだ。

長い旅をしてきたようにマントがボロボロで、その下に見える服は可愛いスクール水着のように見える。

貴族相手でもひるまず睨みつける彼女に、男の怒声が浴びせられる。

「きさまああ！半魔族の分際でこの偉大なる四英雄の一人、勇者であるボージャック・ブージン様の馬車を足止めしおって！」

少し視線を移すと、高価な衣装を身にまとった男女の貴族がふたり、豪華な馬車の前に立っていた。

「はあはあ……あんたが勇者？笑わせるわ！こんな狭い道を馬車で通るのがわるいんでしょ！この子が引かれるところだったのよ！」

震える親子の前に立ち、黒髪の少女が真っ向から貴族に逆らっている。意思の強そうな赤い瞳がまっすぐ貴族を見つめていた。

「ふん！女王様よりの火急の招集を受けたのだ！この勇者であるボージャック・ブージンさまの行く手を妨害した罪は重いぞ！」

そう言って譲らないのはブージン候爵家の長男のボージャックか……権威を振りかざす傍若無人なことでも有名な奴だ。

特に女子供を粗暴に扱うことが多かったため、女王により政権から遠ざけられていた人物だったけど……

周囲にいる人に状況を聞いてみたが、やはりボージャックたちがこの狭い道を無理やり馬車で通ったために危うく親子を引きかけ、そこを半魔族の少女が魔法で馬車を止めたというのだ。

ボージャックはごてごてした装飾の剣を黒髪の少女に突き付けているが、怯む様子はない。

見かねてボージャックの横にいた女貴族が紫の長い髪と爆乳を揺らし抗議する。

「それに王都に半魔族が紛れ込んでいることも四英雄の一人、エディム教の聖女ルシア・セイスターが見過ごすわけには行きません！」

あいつは大司教の娘でルシア・セイスター。
純白のローブを身にまとい、一見穏やかな雰囲気少女だが、でかい！
おっばいが！これまで会ってきた女の子の中でやはりダントツにでかい！

しっかりと上向いた乳首の形がはっきりわかるほど今もローブを窮屈そうに押し上げている。

身体のくびれと太もものムッチリ感がまたなんとも……しばらく会わないうちにさらに成長しているようだ。

だがルックスがいいだけに、中身がごう慢で守銭奴だからがっかり感が半端ないんだよなあ……

ルシアは実家のグラデシアでぼくと幼馴染だった。

昔はよく遊んだりしていたのに、学園に入ってから変わってしまった。こんな子じゃなかったんだけどなあ……

今では下賤な田舎貴族と知り合いではありませんと否定してくるけど。

ボージャックとルシアは左手の紋章を集まった民衆に見せつけながら、やたらと四英雄の勇者と聖女であることをアピールしていた。

「あの紋章は！……はあ～よりによってあいつらが魔王を倒すための仲間なのか～」

ぼくもあの二人と同じく左手に現れた賢者の紋章を見てさっきよりも深い溜息がでる。

魔物との戦争が定期的に行われているこの世界では魔物の血を引く半魔族は嫌われているし、相手が面倒な貴族なのもあって誰も仲裁に入ろうともしない。

貴族の馬車を止めてしまったのは問題だがそもそも馬車の通行が違法だしな。

あのふたりには面識もあるし取りなしてみよう。

「まあまあボージャック様。誰も怪我がなくて良かったじゃないですか」

声をかけて、ぼくは人混みから一歩踏み出す。

「なんだとおおお！誰に気やすく！？……チッ……おまえか……成り上がりのアスマ・グラデシア……」

途端にトーンが下がるボージャック。ルシアもおもむろに視線をそらす。

こいつらぼくにすごい借金があるからね。あと最後小声だったけどしっかり、成り上がりって聞こえたぞ。

「ここは本来馬車は通れなかったはずでしょう？無理に通られたボージャック様にも責任があるのでは？」

「それは……女王さまからの火急の招集であったのだが、ちと遅れてしまっ
てな……つい」

先程までの威勢はどこへやら……うなだれる勇者ボージャック。

「とにかく誰も被害なくすんだのですから、寛大にお許しいただけないでしょうか？」

身分は向こうが上なので一応、下手にでてあげよう。

しかし馬車も目立った外傷なく止められていたし、よほど高位の魔法が使われたのだろう。

黒髪的美少女もなかなかやるなあ。

ちらりと彼女の方を見ると、ぼくのことを不思議そうに見つめている。

「だいじょうぶ？ここはまかせて」

安心させるために小声でつげると、少女はこくこくと相槌をうち大きな瞳でまっすぐぼくを見つめてきた。

「アスミさん……それが……少し問題がありまして……」

ふいにルシアが爆乳を揺らしながら、しゃしゃり出る。

「馬車をちんちくりんの半魔族に止められた時、わたしの大切な宝物をぶつけてしまったのです……」

と白いローブのたわわな爆乳のすきまから懐中時計を取り出して、指をさす。

「誰がちんちくりんよ！うし乳女！」

黒髪の少女がしゃあーっと猫みたいに威嚇する。

「誰がうし乳ですの！ちんちくりん！」

ルシアもまたキイーッと吠える。

そして、くるりとぼくの方を向き爆乳をぶるんぶるん♥と揺らしながら詰め寄ってくる。



「ほら！ 見てくださいアスミさん！ ここに！ わたしの大切な懐中時計に傷が
.....ああ、コレ一つでお城も買えるというのに.....」

いや、お前のでかいぽよぽよ♥おっぱいの間に挟まれていたなら傷の付きよ
うがないだろ！ いい加減にしろ！

「おお！なるほど……うむ、俺も特注で作らせたこの宝剣に傷がついてしまったではないか！」

ボージャックも剣の柄にある宝石を見せつけてくる。もちろん目に見えるような目立った傷ではないのだけど……

「つまり、それらを弁償しろと？」

「みなまで言わずでない！これだから成り上がりの田舎貴族は……」

怒り始めるボージャック、なんでこいつはここでごう慢になれるのだろう。

「わかりました。あなた方にお貸ししている借金はチャラにしましょう。それで許してあげてください」

「ほんとうか！？」

「いいのですか！？」

ぼくの申し出に逆に驚くふたり。

「んんん？そうかーそなたがそこまで頼むなら、よかろう。飛び出した娘と母親は、許してやろうではないか！俺は寛大だからな！」

「ええ！ええ！素晴らしいご判断ですわボージャック様♥」

なぜかボージャックが威張り、ルシアが称賛している。

「貴様の顔を立てて我らの借金は無かったということで、いいな？間違いないな？」

念をおしてくるボージャックに「はいはい」と答えてやるとボージャックとルシアが途端に上機嫌になる。

こいつらに借金の催促しても毎回ごねて面倒くさいのでむしろ縁が切れて良かった。

「さあ、あいつらの気が変わらないうちにお帰りなさい……」

「ありがとうございます！ありがとうございます！」

「お兄ちゃん、お姉ちゃんありがとう！」

申し訳なさそうな母とぼくたちに必死に手をふる娘は人混みを抜けて消えていった。

「よかった……」

そうつぶやいて、娘に手をふっていた半魔族の少女がこちらを向く。

「おにいちゃんありがとう♥助かった♥」

おにいちゃん！？今、美少女におにいちゃんと呼ばれた！？

明るく人懐っこいけれど、どことなく色っぽい仕草で少女がはにかむ。

「当然のことをしたまでだよ。美少女の危機は世界の危機だからね！」

「なによそれ♥あははは♥」

ぼくと半魔族の少女、そして周囲の野次馬たちもほっと一息した瞬間だった。

「何をイチャついているのだ？俺にたてついた半魔族の女……お前を許した覚えはないぞ！」

「え？」

突然ボージャックの抜いた剣が半魔族の少女を一閃する。

「きゃああああああああああああああ！！！」

派手な血しぶきと悲鳴が上がる。

「う、うわあああああ！！」「いやあああああ！」

一瞬の惨劇に街の人たちも悲鳴を上げ蜘蛛の子を散らすように逃げてゆく。

「お前なんてことを！」

ぼくはとっさに倒れ込む半魔族の少女を抱きかかえた。

「ふん！思い知ったか！」

「ボージャック様！なんにもそこまでしなくても！」

「うるさい！お前も口出しするな！いくぞ！」

ボージャックはそのままこちらを見ようともせず、ルシアを馬車に押し込み去ってゆく。

くそ！なんて奴だ！だが今はこの娘の治療が先だ！

「うう……あ……あたし……まだやらなきゃ……いけないことが……」

「大丈夫。いま治してあげるからね」

力なく震える、細い手をにぎりしめる。

「念の為にリザレクションにしておこう」

感染症とかもあるし、とりあえずこの世界で最高位の回復魔法を選択する。

意識を集中すると左手の賢者の紋章が輝き出した。

「その……紋章……」

身体中の魔力を込めてぼくは高らかに叫んだ。

「リザレクション！！」

まばゆい光が彼女を包み込み、ボージャックに斬られた傷が何もなかったかのように消えていったのだった。

魔法の力で斬られた傷がみるみる消えていく光景にあ然とする半魔族の少女。

「え？これって……うそ！……第一位の奇跡魔法！？」

リザレクションはこの世界では死者を蘇生し傷も完治できる最高位の回復魔法だ。

「よかった。治ったんだね……」

彼女が起き上がる代わりにぼくがばたりとその場に倒れ込んだ。

「おにいちゃん！」

少女の声を聞きながらぼくは意識がとびそうになる。

「あーやっぱり魔力切れ起こすよなあ……」

「魔力切れって……人間が第一位の奇跡魔法を使って魔力切れだけですむの！？」

「これでもぼく四英雄の一人の賢者なんだよ。小さい頃からいろんな魔法は使えるけど、なぜか初級魔法でもすぐ魔力切れ起こしちゃうんだよね」

「おにいちゃん四英雄の一人なの！？そうなんだね……かなり変わっているけど賢者の加護もあるのかな……」

「え？今なんて？」

なにか慌てたように急に頭を下げてくる少女。

「あ、えっと！ありがとうございますおにいちゃん！おかげで命を救われました！」

「無事で何よりだよ。僕の名前はアスミ・グラデシアっていうんだ。君の名前を聞いていい？」

「あたしは……ティア・ドーラっていいます！よろしくねアスミおにいちゃん
♥♥♥♥」

「ティアちゃん！かわいい名前だね。まるで天使みたいだ」

「えー天使みたいだなんて♥あたし実は……サキュバスなんだけどなあ♥ほらあ魅惑的でしょ？」

うっふんと丸いお尻をふりふりしながら、スクール水着のような衣装でつるぺたな胸を張りポーズをとるティアちゃん。魅惑的と言うよりも可愛い♥……ってサキュバス！？

「ティアちゃんサキュバスだったんだ……うんよく見たらすごくセクシーだよ！すごいセクシー」

「……なんかバカにされてる気もするけど……まあサキュバスと言っても、人間の血が混じっているんだけどね♥いわゆる半魔族ってやつ」

やっぱり半魔族、魔物との混血だったんだ。魔物からも人間からもつまはじきにされる悲しい存在だ。

「はあ半魔族だから人間からのダメージも食らっちゃうな……ううやっぱりあたし最弱の魔王じゃん……」

「どうかしたの？深刻そうな顔だけど」

なんだかため息をついてぼやいているティアを倒れたまま見つめている。

「あ……ううん、なんでもないよ♥ところでおにいちゃん倒れたままだけど大丈夫なの？」

「うん……まあ一時間くらいすれば起きられるけど……このあと女王様に呼ばれてるから遅れるとちょっとね」

「ごめんなさい……あたしのために」

シュンとしよげるティア。

「いや！問題ないとも！美少女のティアちゃんに出会えたんだから後悔なんてないさ」

「そんな……♥おにいちゃんってば優しいんだね♥」

「あ～あぼくも、魔力さえあればなあ……魔法自体はいろいろ使えるんだけど。せっかくのファンタジー世界なのになあ」

「そうなんだ……じゃあ魔力が戻れば大丈夫なんだよね？」

そう言うとティアは、ちっぱい胸に手を当て深呼吸をする。

「ちょっとだけだからね♥」

「ふえ？」

ティアの愛らしい顔がどんどん近づいてくる。

そして……唇が触れた。やさしい口づけだった。ティアとの甘い香りのファーストキス。

「んふう……ちゅぷ……♥」

唇のやわらかさを二度、三度と感じる。それと同時に失われた魔力が急速に戻り始める。

「君は……」

「おにい……ちゃん……♥♥♥♥」

赤く妖艶な色の瞳が徐々に艶やかに輝いていく。

「はあ……すてきな唇……」

ちゅぷ♥ちゅぱ.....んちゅ♥

ティアちゃんとの軽い口づけは徐々に唾液を絡ませる濃厚なキスに変わっていく.....

サキュバスの舌だからなのか初めてだからなのか、キスだけでちんぽがガチガチに勃起しちゃってた.....

「あたし.....ドキドキしちゃってるよ♥ほら触ってみて♥♥♥」

ちいさな手を重ね、自らの穏やかな膨らみにぼくの手をあてがわせた。

トクントクン♥

小さな鼓動がふわりとした柔らかさとともに手のひらから伝わってくる。

「ティア！」

んちゅ♥ちゅぷ.....ちゅうう♥♥♥ちゅぷ♥♥♥♥♥♥♥♥

今度はぼく自ら彼女の唇をうばう。キスなんて初めてだからわかんないけど、とにかく彼女と繋がりがかった。

「ふうん♥♥♥はぷちゅ♥あはああ♥♥♥情熱的だけど.....ちょっとがっつきすぎだよおにいちゃん♥♥♥」

「ご、ごめん.....」

「んふふふ〜♥でも.....」

ティアが右耳に口元を寄せてきた。



「そこが.....かわいい.....」

はふう♥♥♥

耳たぶを甘噛されうろたえてしまう。

「ティア！？」

瞳をまっすぐ見つめて、赤い瞳のサキュバスはぼくの腰にまたがった……

「えへへ♥♥♥なんか萌えてきた♥♥♥おにいちゃんのこと本気で欲しくなっちゃった♥」

ティアは僕の顔のすぐまえで首元の布を引き下げ、ふたつの愛らしいふくらみと先端の桃色の突起が見えた！

「んふふふ～あれあれ？おにいちゃんのおちんぽお……なんかおつきくなつてない？」

「そ、そんなこと……はう♥♥♥ダメだよティアちゃん女の子がこんな事しちゃ！」

ぼくのちんぽを弄ぶように、布越しに揺れる揺れるティアのおまんこの感触。

「えーあたしがここまでしてるのに、そんなこと言うんだあ♥つまんなーい♥ああん♥♥♥あたしの割れ目におにいちゃんのおちんぽぴったりハマっちゃってるよお♥♥♥ほらあほらあ♥♥♥」

うう……清楚な美少女に見えたのは最初だけだったなあ。さすがサキュバスとんでもないビッチだ！

「ああん♥あたしのおまんこ持ち上げられちゃってるよ？ちんぽの勃起やば！おにいちゃんってば童貞？ちょっとコスコスしちゃっただけでガッチガチじゃん♥やっぱ一きやはは♥」

さらに煽りがエスカレートしてきている。こいつ！幼い見た目しておきながら完全にメスガキじゃないか！

「あれれ？四英雄とか言っていたのにサキュバスにスマタされておちんぽ気持ちよくしちゃっていいのお～♥ほらほらあ♥魔族のおマンコをわからせてみせてよお♥賢者様♥♥♥♥」

「こら！いい加減にしなよティアちゃん！ほんとに襲っちゃうぞ！」

ぼくの必死の抗議すらもニヤニヤ笑いながら、ちんぽを股で擦り上げるのをやめてくれない。

「え——！まだ抵抗するんだあ♥ちんぽガチ勃起させてくるせにさ♥♥♥♥童貞くさっ♥♥♥♥♥」

「こ、こいつ———！！！！もうどうにでもなれ！煽ってきたのはティアのほうだからな！このメスガキサキュバスめ！」

ぼくは我慢の限界に達したちんぽを引きずり出すとティアのスク水をかき分ける。

かわいらしい、全く毛の生えてないつるつるマンコに一瞬目を奪われた。それと同時に沸き起こる性欲が爆発したのだ。

「うおりゃああ！可愛いロリサキュバスマンコで童貞喪失だあ！」

「ひゃああああああん♥♥♥きたあ！童貞ちんぽきちやったああああ♥♥♥すご♥♥♥」

突き上げる！ぶちぶちぶちとなにか抵抗を感じるが構わずに突き上げる！

「ひゃん！あたしのヴァージン！おにいちゃんにあげちゃううっ♥♥♥♥♥あああん！すご♥すごい♥♥♥これがおちんぽセックス♥♥♥すごおおおおおい♥♥♥♥♥」

ぼくの腰の上でちいさなティアの身体がぱちゅんぱちゅん♥と跳ね上がっている。

肩紐をずらしたスク水がぺろんと外れる。すこし日焼け跡を感じる白い肌、おっぱいの揺れはおこらないけど桃色の可愛らしい乳首が上下に揺れる残像がエロい！

「はああん♥♥♥またおちんぽ大きくなってる！？やば！♥♥♥♥♥おにいちゃんのおちんぽ♥♥♥やばい！サキュバスなのにイカされちゃう！」



ティアがキスをしてくる.....ぼくのちんぽと口.....彼女とつながっている部分から温かい力が流れ込んできた。

「アスミおにいちゃんのリザレクションほんとうにスゴかったあ♥傷だけじゃなくてあたしにかかっていたスキル封印の呪いまで解呪しちゃうんだもん！」

ひとしきり初めてのセックスの余韻に浸っているとティアがそう言って微笑んだ。

「そうなの？よくわかんないけど君の役に立てたならよかったよ」

照れながらふたりで微笑みあう。ティア・ドーラはゆっくりとぼくの頬を両手で掴むと……

ちゅうううううううう♥♥♥

と熱烈なキスをしたうえに強引に舌をねじ込み絡ませてきた。

しばらくの間、舌と舌が絡み合い求め合う。口の中でも抱きしめあってるみたいだ！

ふはあ♥

潤んだ赤い瞳と唇同士につながる糸が鮮明に記憶に残る。

いつまでも繋がっていたかったのに……

「もう……行かなきゃ。魔力回復できたかな？」

ティアが寂しそうに唇を離してそう告げた。

「え？あれ！？魔力が戻っている！え？なんで？」

ふつうは一時間はかけて戻る魔力が完全に戻っていた。むしろちょっとオーバーするくらいに！つまりは最大MPが増えた気がする！

「ふふふ♥サキュバスとエッチなことをすると精気や魔力を吸われちゃうけど、逆にサキュバスが望めば精気や魔力を与えることもできちゃうの……」

そうなんだ！知らなかった。それにしてもぼくの魔力って高価な魔力回復ポーションをがぶ飲みしても回復しないのに、それをエッチで回復できちゃうなんてティアの魔力量すごいのかも！

「それと、大事なこと……あたしが書き換えたこの戦い、『バトルファック』でおにいちゃんにはフェアに戦ってほしいから……」

「？」

そう言うとティアは紋章に手を触れた。左手が熱くなる感覚、あれ？なんか紋章の形が変わった気がするけど……

「本当は、あの勇者と聖女も紋章を変えるつもりで来たんだけど。あいつらはいいや。」

「？」

「じゃあまた会おうね……英雄のおにいちゃん♥」

キスの余韻と魔力の回復でぼーっと呆けてしまっているうちに、ティアはどこかに消えてしまっていた。

ティア・ドーラ……不思議でめっちゃ可愛いサキュバスの少女。

また会えるかな……後ろ髪を思い切り引かれつつ、おきあがったぼくは遅刻しないようにお城へと走り出す。

気のせいかさっきよりなんだか身体も軽い感じがする……

「ん？あれ？財布がない？」

2. 爆乳聖女の罾と美少女貴族の罵り公開処刑、復讐のはじまり。

「よくぞ集まった。四英雄たちよ……」

凜とした女王の声が城の広間にひびきわたる。

ブラウンの美しく長い髪が腰まで伸びている。スタイルも抜群で体のラインがすごく強調されながらも豪華なドレスを見事に着こなしていた。

まさに大人の美貌！体のラインがエロさを体現している。

大きいながらもピンと上を向いた張りのある胸、細くくびれたウエスト、お尻も艶めかしくスリットからこぼれる白い太ももに誰もが目が釘付けになるのだった。

彼女こそエデンの国の女王シーア・エデンである。

「女王様お召により参上いたしました」

賢者であるぼくと勇者ボージャック、聖女ルシアが女王の前に膝をつく。

「ちっ……なんでお前がいるんだ……」

ボージャックがぼくを横目で見ながら、ちいさく舌打ちした。

「慎んでください。ボージャック様……わたしたちは選ばれた四英雄なのです。魔王をたおすためにも協力しなくては。」

ルシアがボージャックをたしなめるが、ぼくを見ている顔はひきつってる。

「控えなさい！女王様の御膳ですよ！」

女王シーアの横に並ぶ彼女お気に入りの有力貴族が叱責した。

ちなみに有力貴族の一同はみんな美少女だった。

美少女大好きな女王シーアと肉体関係がうわさされている百合な美少女貴族たちに逆らえる人間はこの国にはいない。

彼女たちがわがまま放題好き放題やってしまったせいで財政がやばいことなり、それをぼくが立て直したのだ。

まあ美少女貴族たちの頼みだから聞いてしまったというのも大いにある。

財政の立て直しの一環で前世のファッションを流行させ、彼女たちに売り込んだところ大ヒット。

そのせいで異世界の貴族でありながらJKファッションやゴスロリ、チャイナや和服などのアレンジ服を着飾り並ぶようになってしまった。

華やかで実にはいいんだけどね。

出会った頃はすごくちやほやしてくれていた女王と美少女貴族たちだけど、借金の返済をお願いするようになってから雲行きが怪しくなってきた。

一度ビシッと教育しなきゃいけないところなんだけどなあ。

「もうひとりの英雄である拳聖の紋章を持つものも搜索中である。見つかり次第合流させると約束しよう」

そうか……まだ拳聖は見つかっていないのか……かわいい女の子だったらいいなあ♥

「さて、お前たちに集まってもらったのは、四英雄にだけ与えられる特別なスキルを授けるためである。」

おお！ファンタジーっほい！そうか特別なスキルをもらえるなら悪くないな！

「このスキルは魔王との戦いに大いに役に立つであろう。さあ選ばれし英雄たちよ！この水晶に左の手で触れるがよい！」

「まず俺からだな！」

女王の言葉が終わる前に、ボージャックがドカドカと前に進み出て左手で水晶に触れる。

途端にボージャックの勇者の紋章が輝き出した。

「こ！これは！」

水晶から照射された光の文字が空中に浮かび上がる。

クラス:【勇者】ボージャック・ブージン

【精霊の剣】【瞬足】【精霊魔法耐性】【精霊の加護】.....

10種類もの戦闘スキルがボージャックには与えられた。精霊の加護を受け剣で戦う戦闘スタイルのようだ。

「ま、こんなものか.....」

得意げに髪をかきあげるボージャック。

「すばらしいスキルです！ボージャック様！」

「見事だ。さすがブージン伯爵家のボージャックだ！期待しているぞ勇者よ！」

「きゃあああ♥ボージャック様ステキ〜〜♥」「さすがだわ！これぞ勇者ね」「勇者様すご〜〜い♥」

ルシアや女王、貴族の少女たちがボージャックを褒め称える。

「では次はわたしが」

ルシアがぶるんぶるんと爆乳を揺らしながら前に進み出て、白い指先を水晶に置く。

クラス:【聖女】ルシア・セイスター

【聖なる光】【闇魔法耐性】【天使の治癒】.....

ボージャックには及ばぬものの9種類ものスキルがルシアにあたえられていた。光の魔法でバフを掛け回復魔法で癒やすまさに聖女のぴったりのスキルばかりだ。

「ふん！まあまあではないか.....」

「すごいよルシア！さすが聖女様だよ」

「ありがとうございます♥ボージャック様、アスミさん♥」

「さすがだな。聖女ルシアよ……さて」

女王は満足げにうなづくとぼくのほうに熱い視線を送ってきた。強気な瞳がゾクゾクしてたまらないんだよなあ……

「さあ！さいごはお前だぞ。賢者アスミ・グラデシアよ！」

「はい！」

水晶のうえに左手を置くと紋章が輝き出した。緊張するなあ……

水晶から桃色の文字が短く浮かび上がった。

クラス：【遊び人】アスミ・グラデシア

【精力絶倫】以上

静まり返る広間。

「えっと？」

「あ……え？……こわれてる？」

「もう一度！賢者！アスミよ！水晶に手をふれるがよい！」

しかし、なんどやっても結果は同じだった……なんなんだよ、どういうことなんだよこれは！！！！

「賢者じゃなくて遊び人って……どういうこと？」

「しかもなんですか！せ、精力絶倫なんて……汚らわしい！」

「やっぱりあーしたちを、そういう目で見てたんだ！……うそ……やだキモい……」

みんなのぼくを見る目が変わっていく、ざわざわとどよめきがたち周囲が重苦しい空気に変わっていく。

なんで！？なんでぼくだけ！！！！

波乱のクラスとスキル鑑定のあとでぼくたちは女王からエデン国に伝わる伝説の装備品が与えられ、別室で着替えさせられた。

その姿をお披露目し女王と貴族の前での魔王討伐の宣誓の儀が行われる。

「うむ、素晴らしい出で立ちであるぞ。勇者ボージャック、聖女ルシア、遊び人アスミ」

女王さま？本気で言ってます？

たしかに、ボージャックはガチガチの重装備、上から【雷鳴の兜】【水龍の鎧】【精霊の大剣】【風魔の盾】などなど……

ルシアは純白で統一されながらもこぼれんばかりのおっぱいが目立つセクシーな装備【精神のティアラ】【大天使のローブ】【破魔の杖】などなど……

かつての大戦で七大魔将を打ち取ったときにドロップしたと言われる伝説のアーティファクトを主軸にした最強装備のふたり。

間違いなく誰がどう見てもRPGの主人公にしか見えない。

それに対してぼくは……

首元に黒いリボンがひとつだけ。

あきらかにふたりに比べてしょぼすぎる！

アーティファクトの能力が書かれた説明書きによれば、【黒いリボン】能力は『真実を見せる』という微妙な物。少なくとも戦闘ではなんの役に立ちそうにない。

これなら何もないほうがマシだよ！クラスが遊び人ってだけでこの仕打ち！職業差別だ！

だけど女王の手前、用意された装備を付けないわけにはいかない。仕方なく首元に装備したんだけど……ああ！これ呪われてる！？

外せない！はずせないんだけど！！

「あらあら♥よく似合ってますわよアスミさん。ぷぷぷ♥可愛いですわ♥」

ルシアがにまにまとこっちを見てくる。……く、屈辱だ！

宣誓の儀はあっさり終わりいよいよぼくたちが旅立とうとした時、不意に女王がみなを呼び止めた。

「さて、旅立つまえになにか訴えたいことがあると聞いたが……発言を許すぞ。勇者ボージャックよ」

「はっ！ありがとうございます！女王陛下」

仰々しい身振り手振りでボージャックが前に進み出る。なんなんだろう？今から出発って時に……

「俺はこの場で告発したい人物がいる！」

ボージャックの言葉に壇上にいる貴族の女の子たちもざわつき始める。いきなり何を言い出すんだボージャックの奴は。

ん……なんかざわつき方がわざとらしくない？

それにみんながぼくのこと見てる気がするけど……

「ほかでもない！ここにいる遊び人アスミ・グラデシアが魔物の手先である半魔族の女と結託し、俺の馬車を襲わせたのだ！」

「「な、なんですって—————！？」」

みんなが合わせたように叫び声をあげる。いやほんとなんだって一だよ！何言ってるのこいつ！？

「ボージャック様のおっしゃってることは本当です！わたしもその場におりました！」

ルシアが進み出て、瞳に涙をためながら訴え始めた。

え？なんでルシアまで？

「そして馬車の襲撃計画が失敗するや半魔族の女を逃がすために、借金を今すぐに返せとわたしたちの弱みに付け込んできたのです！」

「いやちがう！何言ってるんだよ！」

さらにざわめく貴族の少女たち。

「信じられない……」「なんて男なの！」

痛い！視線が！



「見逃せば借金をチャラにしてやろうって……できないなら身体で払ってもいいんだぞって。わたしの胸をいやらしく揉みしだいて……わたし……わたし……汚されたんです……」

そう言ってデカイ胸がむにゅと寄せられる。

「そ、そんなことしてないだろ！いいかげんにしろよ！いつ、お前のおっぱいなんて揉んだんだよ！」

「うわああああああん！うそですわあ♥わたしのおっぱいをめちゃくちゃに揉みしだいたくせにい♥♥♥」

しかし、ルシアがひざまずき大泣きし始めると同時に一斉に罵声がぼくに浴びせられた。

「最低！女の敵！おっぱい揉むことしか考えてないでしょ！」

「前からキモイと思っていたけど、マジキモイ！やだちんぽたってない！？」

「死ね！ゴミカス！きゃあああああ！いま視姦されたあああ！孕んじゃう！」

とんでもないことを言い出す貴族の少女たち。

「俺が半魔を斬り倒したものの、こいつは逃走。しかし今何食わぬ顔でこの場に現れた、アスミ・グラデシアは自分が賢者だと主張しているのです！」

「違います！女王陛下！ボージャックたちが嘘をついているんです！信じてください！」

ぼくは必死に訴えかけた。なんだってそんなデタラメを言って貶めようとするんだ！ぼくはただ勇敢なティアを助けただけなのに！

「なんということだ……そんなことが……」

女王も完全にボージャックたちの言うことを信じている。

いや、ちがう女王も……ここにいる全員で最初から仕組まれていたんだ！くっ！なんなんだこの三文芝居は！

「しかし！水晶は真実を証明した！こやつは賢者ではなく、遊び人というふざけたもの！それにスキルも汚らわしいものしかなかった！」

「そうだ！ そうだ！ 遊び人のヤリチン男め！」

「世界の危機に遊び人ってなんなの？ どうせ私達を孕ませることで頭がいっぱいなんですよ！」

「精力絶倫ってただの変態じゃん！ うえええ……きもおおおお！」

「女王様どうか遊び人アスミに正義の裁定を！」

周囲の全員から、怒ごうが飛び交う。

やめてくれ！ ぼくは正しいことしかしていないのに！ なんでこんな……

「あいわかった。遊び人アスミ！ 魔物との内通の疑いありとみなし、財産をすべて没収のうえ、勇者パーティーから追放とする！」

女王の宣言にぼくに借金していた貴族たちが「異議なし！」と笑顔で賛同する。

つまり、みんなでぼくを貶めて自分たちの借金をなかったことにするつもりなんだ……

「ただし！ 仮にも紋章が左手にある以上は魔王討伐は当然の義務である！ 魔物との内通の疑いを晴らしたくば単独で魔王を討伐してみせよ！」

「そんな！ まともなスキルも装備もお金もない状態で一人で戦えと言うのですか！ これじゃあ魔王どころか普通の魔物にも太刀打ちできない！」

叫ぶぼくの肩に手をかけボージャックが耳元でつぶやく

「これ以上逆らえば……故郷のグラデシア領がどうなるか……わかるだろう？ よく考えるんだな！」

すぐさまその手を振り払い、ボージャックを睨みつける。

「勇者であるこの俺にに向かって何だその態度はあああ！！」

ボージャックが激昂し拳を振り上げる。

「くっシールド！」

勇者の加護で強化された拳でも、この魔法の盾は防ぐ！何発も何発もだが……

「ま、魔力が……」

空気がなくなったろうそくの炎みたいに魔法のシールドがかき消えた。

ドゴッ！

「うぐう！！！」

みぞおちにボージャックの拳がめり込み、ひざをつく。

「はあはあはあ！無駄な抵抗しやがってはあ……大人しく殴られろカスが！」

倒れ込んだぼくを何度も足蹴にするボージャック。

くっ……母様や領民のみんなに迷惑はかけられないよな……

「はあはあ……そうか……ぼくが甘かったんだね……よくわかったよ」

冷たく青い復讐の炎が心に宿った。

ふう……っと大きくため息をついて痛みに耐えながら起き上がり膝をおる。

「ぼくにやましいことなど一切ありません。ですがお疑いを晴らすため魔王討伐は謹んでお受けいたします。女王陛下」

それだけ告げ立ち上がる。すぐに奴らに背を向けてつかつかと広間を出てゆく。

「せいぜい一人でがんばることだな！遊び人のアスミよ！」

最期にボージャックの声に振り替える。

「お前ら必ず後悔させてやる……」

ギィィィィィィ

嘲笑する腐ったやつらの顔をまぶたに焼き付けて、ぼくは広間の扉をゆっくりと閉じた。

3. 爆乳聖女はサキュバスにクンニされ絶頂する。

～聖女ルシア視点～

やった！ やってやりましたわ！

エディム教大司教の娘にして幼い頃から聖女とみんなにあがめられてきた。

わたし、ルシア・セイスターが目障りだった幼なじみのアスミ・グラデシアをついにギャフンと言わせてやれましたわ♥

エディム教の学園でずっと学年一位だったわたしの地位をあっさり奪い取り、主席で卒業した彼。

そのせいでお父様にも散々叱られ続けました……

王国中の発展に尽力したと聖人とみんなが彼を称えるものだから、聖女と呼ばれていたわたしの存在感がさらにちいさくなってお父様はさらに激怒！

そのうえおせっかいにも、ルシアちゃんの実家のエディム教会を立て直すんだー！ と乗り込んできて。あの時のお父様の顔を思い出すだけで震えてしまいますわ！

あれこれとわたしのためだとか言って……ずっとうざかったのですわ！

でも今回はさすがに参ってしまったようですわね。

広間を出ていく時の悔しそうな顔ったら♥あんなしょっぱい装備で、しかも全く役に立たないハレンチスキルしかないなんて～

あ～可愛そうですわ～♥

「ぼくが悪かったですロシアちゃん！」と泣きついてくれれば

わたしだけの特別な召使いとしてならパーティーに入れてあげてもいいですけど～♥

さてさて、わたしと勇者様でまずは魔物討伐ですわね。

魔物たちも最近活発になってきているそうですし、このあり余る有能スキルと最強装備で、ちゃちゃっと討伐してみせましょう！

～数時間後、グリーンドラゴンの洞窟～

「おかしいですわ！？ここには大人しいグリーンドラゴンしかいなかったはずなのに！」

洞窟の中には手足が緑の鱗で覆われているものの、どう見ても妙齡の美女がいました。

「なんだ？こいつも半魔族か？俺たちはグリーンドラゴンを討伐しに来たというのに！」

勇者であるボージャック様は不可解な顔を浮かべる。

「ん？ワシがグリーンドラゴンじゃが？新しい魔王の力でこの姿になってしまったのじゃが……割といけとるじゃろ？」

ふふん♥とおっぱいをぶるんぶるんと震わせて、抜群のスタイルを見せつけてきますの！

「きいいい！勇者様、姿は変わっていてもあいつがグリーンドラゴンみたいですよわ！討伐しちゃってください！」

「そうか！まかせるがいい！俺のスキルで薙ぎ払ってやるぜ！奥義！閃風斬りい！」

最初の手柄と意気込んでいきなり奥義を打ち出していますね。

勇者様は精霊の力を剣技に乗せて相手の弱点を突く戦い方。

今は風の精霊の力を使った斬撃でドラゴンを攻撃中ですわ！
まあ……風属性のグリーンドラゴンに風属性の攻撃をしても効果は薄いのですけど……

これは後々あの脳筋にしっかり教え込まないとダメですねえ……はあ……

ともあれ、最強装備と最強スキルの組み合わせによる攻撃です。

いかに効果薄い同属性攻撃といえどただで済むはずは……

ぽひゅ……

「え？」

しかしグリーンドラゴンはまったくの無傷！？

「ふあああーなんじゃ？今のは攻撃か？ワシは平和主義者じゃが降りかかる火の粉は遠慮なく吹き飛ばすぞ？」

グリーンドラゴンがゆっくりと近づいて右手を振り上げ勇者様に一撃をかます！

「勇者様！危ない！」

パシィィィン！！！！

心地よい音が山頂に響いた。

勇者様は顔にドラゴンの一撃を受け……ほおに真っ赤な手形がついていた。

「ぶった……ぶたれた……父上にもぶたれたことなかったのに！」

いや！ぶたれた！だけで済むはずないでしょうに！人間態になってるとは言えドラゴンの一撃ですよ！？普通なら首が取れてますって！

「おお？そうか……戦い方が変わったんじゃないかな。やはりカもぜんぜん入らんのお」

ドラゴンがぼやくと急に緑の瞳をトロンとさせた。

「うむ……ワシの好みはどちらかといえば、こっちじゃな♥」

ほおをぶたれて放心している勇者様を無視してドラゴンがわたしに向かってきてるう！？

「ひい！ゆ、ゆうしゃ様！助けて！ドラゴンが！ドラゴンがあ！」

「ふふふ。そなたたちが今回の勇者パーティーなのじゃな？ならば……みごとワシを『わからせて』みるがよい♥」

ドラゴンの真紅の唇から、長い舌がチロチロとうごめいています！

「ふふふ怯えるでない♥夢見心地にさせてやろうではないか♥」

パチンッ！

「ひゃ！ひゃあああああ！」

グリーンドラゴンが指を鳴らすと手足に植物のつたが巻き付いてきました。ピンと手足が四方向に伸ばされて！ふああ♥

「やめなさい！わたしは！わたしは！選ばれし聖女なのですよ！こんなふらち格好を！」

わたしの股間に顔を近づける女ドラゴンに身をよじり抵抗する。

「ワシも不本意であるが仕方なからう♥イカせあい精魂つきはてたほうが負ける。そういうルールなのだから……まあいゆるバトルファックじゃな！」

「バ、バトルファック！？い、意味がわかりません！これでも喰らいなさい！」

女王様から頂いた破魔の杖をドラゴンに向ける。まばゆい光がドラゴンを包み込んだ！

「ぬあああああ！」

「や、やりました！あれ？」

「ああ、びっくりした。よくもやってくれたのお！たっぷりお仕置きしてやろうではないか！」

ああ……やっぱりダメだ。ダメなんだ！どうして？なんで？わたしは聖女ルシア！ようやく本物の聖女と認められた選ばれし四英雄なのに！

ドラゴンの舌が……わたしの大事なところに……ああ！ああああああああ！

ザラザラと布ごしに熱い吐息と舌のねっとりとした感触が伝わってきます
……

「ひぐっ！やめ……やめてえ！」

「ふふふこういうことは初めてみたいじゃなあ♥ワシにまかせておけ♥たっぷり気持ちよくさせてやるからのお♥♥♥」

するりと下着が剥ぎ取られてしまいました！やだ！見られてる！魔物に！わたしの大事なところが！

アーちゃんにも見られたことないのに……っていうかボージャック！あいつは、なにやってるんですか！？

「ゆ、勇者様！助けて！助けてください！はやく！はやく！！！」

「ひっ……だって魔物怖い……女怖い……」

「は……はあああああああああああああ！？」

なんなんですか！あの腰抜けは！女に一度平手打ちされたくらいで！

「なっさけないのお……あれが今回の勇者か？あんな男よりワシのほうがよ
かろう？なあ聖女よ♥」

「いやあああああ！魔物はもっといやあああああ！」

「ふうむ……しかたないのおこれは誰が主人であるかしっかりと『わからせる』
必要がありそうじゃな」

ドラゴンの舌がじゅるりとうごめいて……わたしのマンコを縦になぞってきます！

「ひゃん！ひゃうううう！くすぐったい！」

ちゆる……ちゅぷ……ちゅぱあ♥

ああ！舌が！魔物の舌があ！わたしの神聖なおまんこに！

ちゆるう……ちゆるる……ぬちゃあああ♥♥♥

「うう……きもちわるい……やめて……やめ……」

「すぐによくなるわい♥」

にゅちゅ♥♥♥……ちゅぱああ……ちゆるるるるるう♥♥♥

「いやああ……やだ……むりいい……キモい！マジキモいからああ！」

ゆっくりと、ゆっくりとわたしのまんこは魔物に犯されていく……

ああ.....だめえこんな.....

「ふむふむ.....綺麗なピンク色じゃなあ愛らしく、くぱくぱしておるぞ？」

「ひいいい！ やめてえええ！ 実況しないでええええ！」



これではドラゴンというよりサキュバスじゃないですか！？あああああああ
あん♥♥♥

「そんな♥♥♥舌が♥♥♥魔物の舌が♥♥♥ううう汚される♥♥♥」

ちゅば♥♥♥♥ちゆるちゆるう♥♥♥

「ひい♥♥♥♥♥奥まで！？あああああああ♥♥♥♥♥」

「ふふふ♥♥♥ワシも鬼ではない処女膜はとっておいてやるぞ♥♥♥ああ♥♥♥た
まらぬ臭いじゃ♥♥♥♥♥」

ちゅぶ♥♥♥♥♥ちゆるちゆる♥♥♥♥♥ちゅぷう♥♥♥♥♥

「やらあ♥♥♥アーちゃんにもこんなに見られたことないのにい♥♥♥♥♥ああ
♥♥♥♥♥ああああああああああ♥♥♥♥♥イク♥♥♥」

ちゅううう♥♥♥♥♥ちゅぶううツ♥♥♥♥♥

「イクがいい♥♥♥無様にな♥♥♥♥♥」

「ひぎいいいい♥♥♥♥♥イクうううツ♥♥♥♥♥サキュバスクンニで負
けちゃうのおおおおツっ♥♥♥♥♥」

ビグンビグン♥♥♥ぷしゃあああツ♥♥♥♥♥

「ふふふ♥♥♥これに懲りたらもう、ここには近づくとでないぞ♥」

ああ.....そんな.....魔物にわからせられちゃった.....

4. 美少女貴族たちのお風呂レズを覗き見みながら、メイドサキュバスと密室セックス。

～少し時間を遡り王都～

王都エデンの門をくぐり、勇者ボージャックと聖女ルシアが女王たちに盛大に見送られている。

近くの山に住むグリーンドラゴンを手始めに討伐するらしい。

「わざわざ山に引きこもり大人しくしている魔物を挑発することもないだろうに……」

まあ、あいつらの考えていることなんてどうでもいいか……

王都の中央通りに面する宿屋の二階から仰々しい送別を眺めながら今後の事について考える。

十年かけて築いたぼくの財産が全部没収されたのはさすがにきつかった。

一度グラデシアに戻って母様に事情を話して融通してもらうしかないな。こんなに辱めを受けたぼくを兄様が領地に迎え入れてくれるかわからないけど……

ここの宿の主人とは前から懇意にさせてもらっていたので宿泊費は待ってもらっているが甘えてばかりだと信用を失う。まともな装備も買えないし、仲間を雇うこともできやしない。

「せめて無くした財布が見つかれば……やっぱりティアに盗まれたのかな……いやいや簡単に人を……サキュバスを疑うのはよくない！でもなあ……」

さっき痛い目を見たばかりだからなあ。女王や貴族たちを美少女だからって甘く見ていたのがまずかった。

こんどは確実にこの国を牛耳って、女王も貴族たちもぼくに絶対に逆らえなくしてやる！

だけど魔王討伐して名声を得るのも今のままじゃあ難しいし、もういつそ魔王に寝返ってしまおうか。そんなことを考えていたときだった。

「あれ？あの子ってまさか……」

中央通りの勇者たちと入れ違いで入ってきた女の子。

宿のそばまで来てもおぼろげにしか見えない姿に違和感がある。

黒と白のシックで可愛らしいメイド服は着ているが彼女の薄緑色の綺麗な髪の間から長い耳が生えていた。

魔物だ！しかもあの耳あの娘もサキュバスなのかな？

まさか王都にこんなに堂々とサキュバスが忍び込んでいるなんて。

屋台の並ぶ通りを堂々と歩いていくサキュバス。

周りの人間はサキュバスが歩いていても知らん顔だ。人間に化けているのだろうか？

いや、あれは姿を消す魔法を使っているのか！彼女がおぼろげに見えるのはそのためだろう。

装備している黒いリボンの能力真実を見せる力が発動したおかげで彼女の姿は、ぼくにだけ見えているようだ。

あの着ているメイド服の力か。さらに集中して見てみると……

ピコーン！

【お忍び衣装】『一定時間透明になることができる』『好きな姿に変装できる』ゲームのウィンドウ表示で魔法のアイテムの能力が解説される。

この距離からでもアーティファクトの能力を鑑定できた。このリボン思ったよりも使えるのかもしれない！

「あ……あの子焼き鳥屋の前で止まった。なんか目を輝かせているけど」

サキュバスは焼鳥の匂いにつられて手を伸ばそうとしたが、途中で我に振り返りを振ってまた歩き出した。

なんども、ちらちら焼き鳥屋を振り返っていたけど。

「透明になってもバレないからって盗んだりしないんだ……貴族より魔物のほうがまともかもしれない」

貴族の連中は金も払わず勝手に屋台のものを手に取り食い散らかしたりするからなあ……

しかも散々食べておいてまずいとか言ったりするんだ……まったく！

「と、やばい！追いかけないと」

そのまま城のほうへ向かっていくサキュバスを追いかけるためにぼくは宿の階段を駆け下りていった。

たどりついた城の中でぼくは必死にサキュバスを探す。

「あ！いた！」

お城の豪華な扉の部屋に忍び込んでいる姿を見つけ、同じ部屋に飛び込む。

「ここで何をしている！サキュバスめ！」

「な！？あなたはマナが見えているのですか！？」

やはり透明になる魔法を使っているようだ。

彼女を掴むと透明化が解除され、それまでおぼろげにしか見えていなかった姿がはっきりと現れた。

「そんな！透明化が解除されてしまいました！」

そうか、このリボンこういう力もあるのか。

「く！はなして！はなしてください！マナはこの国の女王を誘拐する使命があるのです！」

「女王を誘拐するだって！？」

とその時、廊下から女王の声と足音が聞こえこの部屋の前で止まった。

「あの声は女王様だ！！やばい！ここ女王の部屋だったんだ！」

ぼくはサキュバスをあわてて近くのクローゼットのなかに押し込みふたりで隠れる。

間一髪、女王と彼女のお気に入りの美少女貴族がふたり談笑をしながら部屋に入ってきた。

狭いクローゼットの空間にぼくとサキュバスのふたりで息を潜ませ外の様子をうかがう。

「やだ！！マナのお尻にへんなのがあたってます！」

「静かにしてよ！見つかったらどっちも殺されちゃうよ！」

ぼくの言葉にたしかに……とうなづくサキュバスのマナ。

「ここは我慢します。でもマナに変なことしたら後で八つ裂きにしますからね！」

緑の髪の幼気な顔の少女は唇をかみながらキッとぼくをにらみつけてきた。

うーん可愛いけどやっぱり魔物だなあ……言うことがぶっそうだ。とそこで隠れていたクローゼットの外で事態が急変する。

「ああ！女王がお風呂に！」



シーア女王はお供につれてきたふたりの美少女貴族、ヴィオラ・ジェシコーとシルキー・ゴスローリに自分の衣服を脱がせ、白いバスタブのなかに立っている。

貴族の少女の一人がなにか唱えると女王の頭上からシャワーのようにお湯が降り注いできた。

女王さまのスタイル抜群の身体がサア——と熱いお湯で濡れていく。

「はじめて女王の裸みちゃったけど、やっぱりおっぱい大きいなあ……」

「マナだってあんなに大きくはないですけどおっぱいには自信があります！」

上から覗き込むとマナのおっぱいはなかなか大きく、メイド服の胸元にはしっかりと白い谷間がうまれていた。

「たしかに立派なおっぱいをお持ちで……」

「な！何を見てるんですか！エッチ！」

クローゼットの外ではお供の美少女貴族たち、ヴィオラとシルキーも着ていた服を脱ぎ捨てている。こちらも形の良い美乳と可愛らしいちっぱいだ。

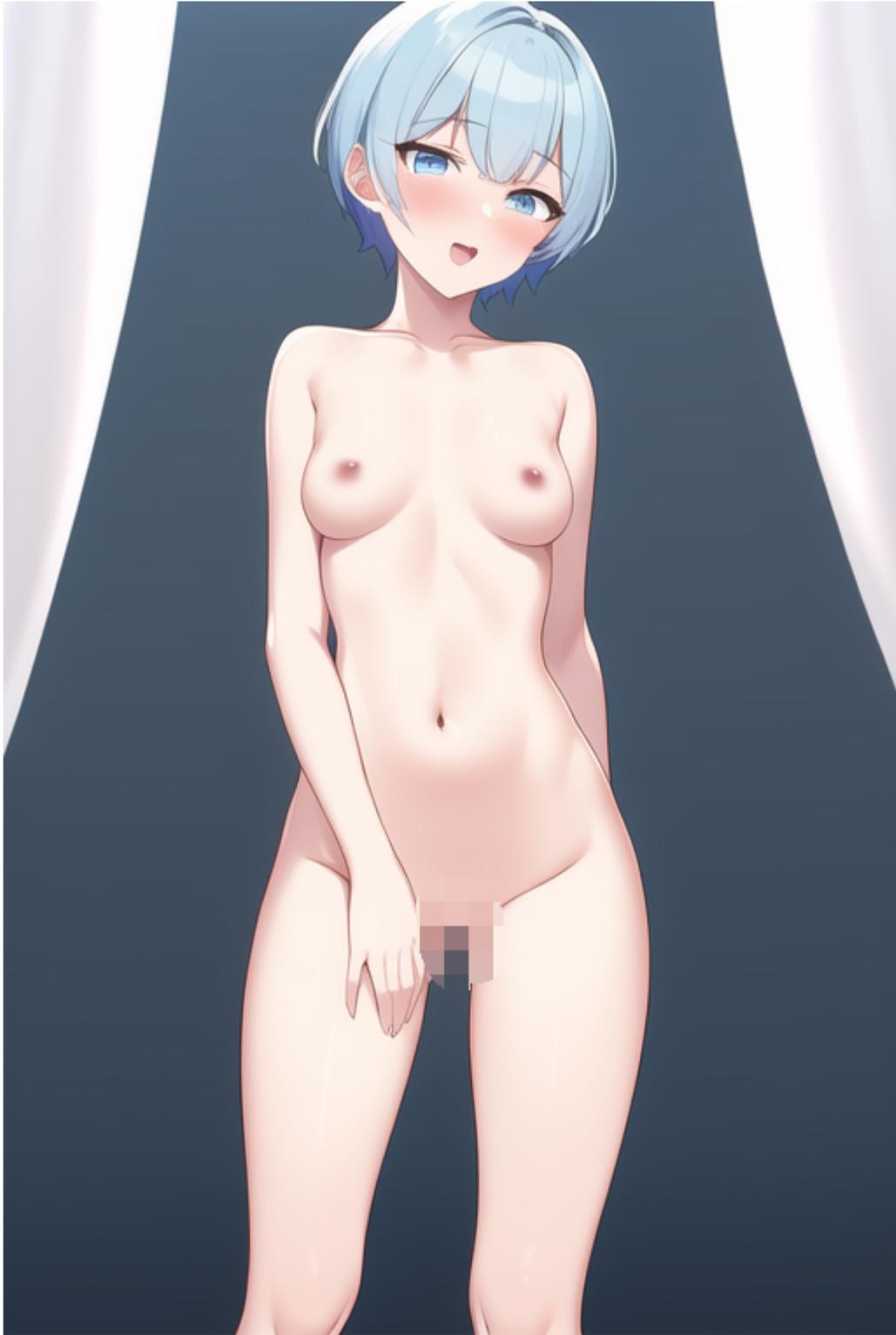
ふたりはきゃっきゃ♥と歓声を上げて女王と同じバスタブに入っていくのだった。

彼女たちは手に手に泡をたたせて、女王のむっちりとした身体をむにゅむにゅと洗い始める。

「え？どうゆうこと！？」

「え、えっちです！」

エデン国の女王と貴族たちがお風呂であらいつこしている光景にぼくとマナはあ然としてしまう。



それは女の子どうして一緒にお風呂に入るといふ可愛らしいものではなく、完全に性欲を満たすための百合の園だったのだ！

女王はそれをさも当然というように貴族たちに身を任せ、乳首やマンコに手が触れるごとに

「あはん♥」

と短く艶めかしい声を上げていた。

狭い密室で隠れてそこから見える光景は、絶世の美女が美少女たちが執拗にお互いの性器をいじりあい口づけをかわし合う姿。

そう！女王もまた手に泡を付けて少女たちの股間に容赦なく手を入れマンコをサディスティックに攻め立てていた！

「ああ♥シーアさま♥いけませんですの♥シルキーたちがご奉仕しないとイケないのにい♥」

「ふふふ.....余を満足させるのがそなたたちの仕事であろうに？ん？なんだヴィオラもこのいやらしい音は？」

「ああ♥♥♥シーア様のゆびの振動すごいのお♥♥♥あーしも立ってられなくちゃっちゃん♥♥♥」

「ふふふ♥ここがいいのであろう？おまえの弱いところは知っておるぞ？」

「ひいん♥そこ！だめだしいー！弱点ですう♥♥♥シーア様にあーしの弱いところ全部知られちゃってるう♥♥♥」

女王の白いゆびが二本まっかなヴァギナに埋もれて凄まじい勢いで震えている。

「女王さまああ♥♥♥女王さまああああ♥♥♥」

バスタブに並んで立つ全裸の美少女貴族、ヴィオラとシルキーは身体をふるふると揺らしながら女王の手マンを必死に受け続ける。

ふたりをイかせることに夢中な女王はかがみこんだ姿勢で巨大な尻をクローゼットに隠れているぼくらに向けていた。

「ああ.....女王さまのマンコがはっきり見える.....」

「すごい……あんなに指が出入りして……」

クローゼットの中でぼくとマナは、ただただその光景をみているしかなかった。でも、それだけでは我慢できなかったみたいで……

マナがぼくの手をにぎって自分のスカートの中に忍び込ませるのがだった！さすがサキュバスやることがエロい！

ぐっしょり濡れたパンツとマンコの熱さを感じながら、女王様とおなじくマナに手マンする。

マナはちいさく「あ♥あっ♥」といいながらひとりで気持ちよくなっているようだ。

それならばと……同時にズボンとパンツを下ろすとマナの手をにぎって自分の股間を握らせる。

「ぼくも気持ちよくしてよ？いいでしょ？」

少しびくりとしながらも、マナは女王さまたちの痴態に魅入ったままぼくのちんぽをシコシコとしごいてくれた。

「これは……ただのオナニーですからね……」

「うん……わかってる」

ふたりともお互いのことを見ないまま、目の前で繰り広げられている光景に熱中しお互いの性器を擦り上げる。

マナのやわらかい手と眼の前に広がる女の子同士のエッチなお風呂の光景にぼくのちんぽから先走り汁が溢れ出す。

「もう……ダメです限界ですのお♥♥♥」

「まだじゃ！ イッてはならん！ならんぞ！」



「ひiiiiiiii♥♥♥むりむりむりiiiiiiii♥♥♥」

「女王様おゆるしをおおおお！おほおおおおお♥♥♥♥♥♥」

「女王さまああ♥♥♥ばんざあああああああい♥♥♥♥♥♥」

ぷしゃあああああ♥♥♥

ぷしゅううううう♥♥♥

ヴィオラとシルキーのふたつのマンコから同時に潮が吹き上がり女王の顔面に直撃する。

「ぷはああ♥♥♥あふうう♥♥♥なんとハレンチな！余の顔面に潮をぶっかけるなど！」

「おゆるしおおお♥♥♥」

「お慈悲をくださいいい♥♥♥」

メロメロになったふたりの従者が愛液まみれの女王を立たせる。

ひとりは後ろから女王の爆乳を激しく揉みしだき、ひとりは股間に顔をうずめむしゃぶりつくように舐め回す。

「くひ♥♥♥ぶれいものおお♥♥♥これでは余も！余もイッてしまうではないかああ♥♥♥」

ストリップ嬢のように身体くねらせて感じまくる女王。

自然とぼくをしごくマナの手が速くなる。それは突き入れている指をもっと速く動かしてほしいと催促するみたいだった。

当然それに答えるようにマナにしている手マンを速くする。まんこに入れている指も手もぐちょぐちょだった。

ぼくのちんぽを握るマナの手もカウパーにまみれのちんぽをしごくスピードがさらにあがる。

やわらかく暖かな手の中でちんぽがビンビンに膨れ上がり、いつでも射精する準備は整っていた。

「あひいいいいい♥♥♥気持ち良い♥♥♥最高じゃあああ♥♥♥あはああああああ
イってしまうううう♥♥♥♥♥♥♥」

ヴィオラから乱暴に爆乳の乳首を引き伸ばされ、シルキーから陰唇を噛み
伸ばされ女王シーアは絶頂した。

「あひゃああああああああああああ♥♥♥♥♥♥♥イクウウウウウウうううう
う♥♥♥♥♥♥♥」

「マナも！マナもイキます！ひゃん♥♥♥」

「ぼくも！出るでるう！」

ぷしゅああああああああ♥♥♥

びゅうううううううう♥♥♥

声を押し殺してふたりオナニーしていたぼくたちは同時にイッた。

どちらともなく、顔が近づいて唇が重なり合う。

ちゅぷう♥♥♥ちゅっ.....ちゅぷ♥♥♥



「はぁ♥♥♥すごく気持ちよかったです♥♥♥」

「ぼくもすごく気持ちよかった♥♥♥」

ちゅぷう♥♥♥んう.....ちゅ♥♥♥

ぼくはファーストキスを体験したその日のうちに別の女の子とセカンドキスもかわしてしまったのだ。

熱い視線がふたりでかわされる。心臓の音がクローゼットの外に聞こえないか心配なくらいに高鳴っていた。

クローゼットの外ではまだ女王と美少女貴族の乱交が続いていた。

狭いクローゼットの中で身動きできないぼくとサキュバスのマナは脱出の機会を伺っていたが……

ただでさえそばで女の子の甘い匂いがしているうえに相互オナニーをしてしまい、クローゼットの中は愛液と精液の臭いが充満していた。

さらに目の前では三人の美少女がおっぱいがぶるんぶるん揺らし、艶やかなあえぎ声をあげている。

当然一度射精しただけでは収まらないぼくは股間を大きくさせてしまう。

「ちよっちょ！ 熱い！ お尻にあたってるおちんちん熱すぎです！」

「ご、ごめん……でも我慢できなくて！」

とっさにぼくはマナを後ろから抱きしめてしまう。

交差した手がメイド服の大きな乳袋をわしづかむ。

「！！！！！」

大きな声がでそうになったマナが必死にくちをおさえて耐えた。

「ふうう♥ふざけて！ マナのおっぱいを触っていいのは四英雄だけなのに！」

「え？ ぼくもその英雄のひとり！ あそびに……いや、賢者アスミなんだけど！」

「こ、こんなところで隠れてちんぽ勃起させてる人が四英雄なわけないじゃないですか！」

そこでぼくが左手の紋章を見せると、マナは目を丸くして途端にもじもじし始める。

「ほんとに……四英雄だった……アスミ様……ちょっとかっこいいとは思ってたけど……でも！マナだって魔王さまにつぐ魔物の大幹部七大魔将の一人なんですからね！」

「七大魔将？きみが魔物の大幹部なの？」

ちょっとぬけてるサキュバスかと思いきやかなりの大物だった。

「なにか？不満でもあるのですか？」

「いやいや！そんなことはないよ！うんうんでも、そもそも七大魔将なのに四英雄に身体許しちゃうんだ？」

「そ、そうですよ！ロマンチックじゃないですか敵味方で恋に落ちちゃうとか！」

ふーん。なんか不思議なこだわりがある子だなあ。

「マナってかわいいね♥……ここでしちゃおうか？」

「！！！！だめです！こんなところで！見つかったら何されるか！」

「大丈夫だよ♥マナが我慢すればいいだけだからさ♥」

魔物とは言え童顔のかわいいメイド少女、しかもおっぱいもお尻もおおきな魅力的なボディを抱きしめているのだから。

「それにほら……コレほしいでしょ？」

ぼくは固く勃起したちんぽをマナの手にそえる。

「！？すごい！こんなに大きいなんて！？それに出したばかりなのにさっきより熱くて硬くなってる♥」

さっきまでシコシコしごいていたちんぽが予想外のおおきさだったのか、びくりと震えたマナだったがすぐにシコシコとぼくのちんぽをさすり始める。

「ああ♥マナの手やわらかくてエッチだね♥それにとってもあったかい♥」

「ふああん♥だってこんなにすごいちんぽ♥はじめてみたんだもん！アスミ様のおちんぽたくますぎです♥♥♥♥」

ニチャニチャと先走り汁が出はじめる。

マナの愛らしい手がぼくのちんぽ汁でべとべとになっていく。

「すごい♥アスミ様のおちんぽすごい！ああ……これをマナのなかに……」

自分の股間に誘導しようとするマナの手からちんぽを引き離す。

「あ……」

残念そうに声を上げたメイドは今度は短いスカートをふりふり振りはじめる。

「ふふふ～どうしたの？お尻かわいくふっちゃって♥」

長く勃起したちんぽの先をマナのスカートのピタピタと叩きつけながら質問する。

「はう♥いじわるしないでください！」

「なに？いじわるって？どうしてほしいか言わないとわかんないなあ……」

「マナのマナの……マナの処女マンコに！長くて固くて熱い！アスミ様のちんぽください！……あう♥♥♥」

かわいい！

「そりゃ！メイドサキュバスのかわいいマンコのバージン奪ってやる！」

ずぷうううううう♥♥♥

「ふああああ！ふああああああん！ちんぽきた！ちんぽきちやったあああ♥♥♥」

やわらかい！あったかい！そして気持ちいいいいいいいい♥♥♥

これがマナのおまんこかああ！ティアとは違った気持ちよさがあるな！うお！きゅんきゅん締め付けてくる！さすがサキュバス！おまんこエッチすぎる！

「動くよ！がんばって耐えるんだ！」

「ひゃうううう♥♥♥無理ですう♥♥♥マナ初めてなのにい！」

「初めてでこんなにエッチなんて！けしからんな！このおっぱいもけしからん！」

メイド服の乳袋からつかみ出した巨乳がブルンと揺れる。

もみもみもみもみ♥♥♥

そのふたつのやわらかくて、あたたかなふくらみを容赦なく揉みしだく！

「ふあ！だめえ！おっぱい！揉まれるだけで感じちゃう！マナのおっぱいいじめないで！」

「こんなエッチなおっぱいをメイド服に隠しておいて！マナは悪い子だ！」

「ふええ♥マナは悪いサキュバスなんですう♥♥♥アスミ様にお仕置きされませう♥♥♥」

ぼくはマナのマンコを容赦なくガンガンに突き上げる。

「あ！あああああ♥♥♥だめ！イク！イクウウ！」

トトロと足元が濡れていく。マナが絶頂したせいで潮をふいてしまったようだ。

「あはあう……イカされちゃった……マナ……サキュバスなのに……」

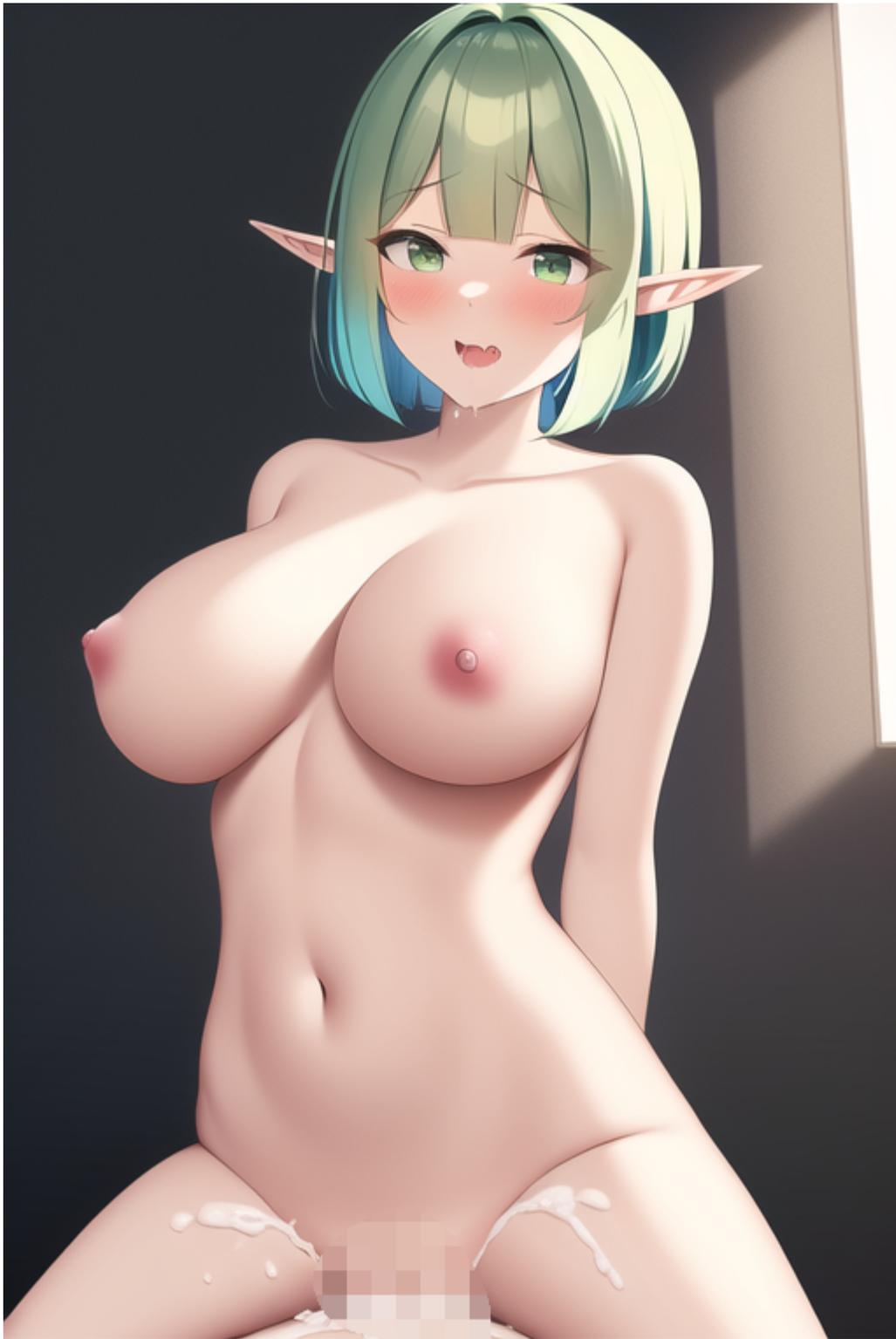
あああ♥♥♥いまだにガクガク震えているマナ

「ああ気持ちいい♥♥♥僕も！ぼくもイっちゃうよ！」

「やああん？ダメ！今子宮に注がれたら！！完全にわからせられちゃう♥♥♥
マナがイっちゃってるときに中出ししないでええええ♥♥♥」

「え！？無理だよお射精しちゃううう！」

どぴゅうううううううう♥♥♥どぴゅうううううううう♥♥♥



「いやああああ♥♥♥またイクううう♥♥♥♥♥♥♥♥♥だめええ♥♥♥アスミ様に負け
ちゃうううう♥♥♥やだああああ♥♥♥封印されちゃうううう♥♥♥」

大声をあげたマナは、クローゼットのドアを開け放ってしまった。

「ななななあ！？」

僕たちのあられもない姿を見た女王さまと美少女貴族たちが固まる。

「ああああ♥♥♥気持ちよかった♥♥♥アスミ様にわからせられちゃったあああああ♥♥♥.....やああん♥♥♥」

バレたのに構わず絶頂しているマナがのけぞり身体を震わせたかと思うと、メイド服を残しその姿がかき消えてしまった。

パンパカパーン！

七大魔将創生のマナを倒しました！LVがあがりました！最大MPが上昇しました！

ドロップ:【お忍び衣装】を手に入れました。

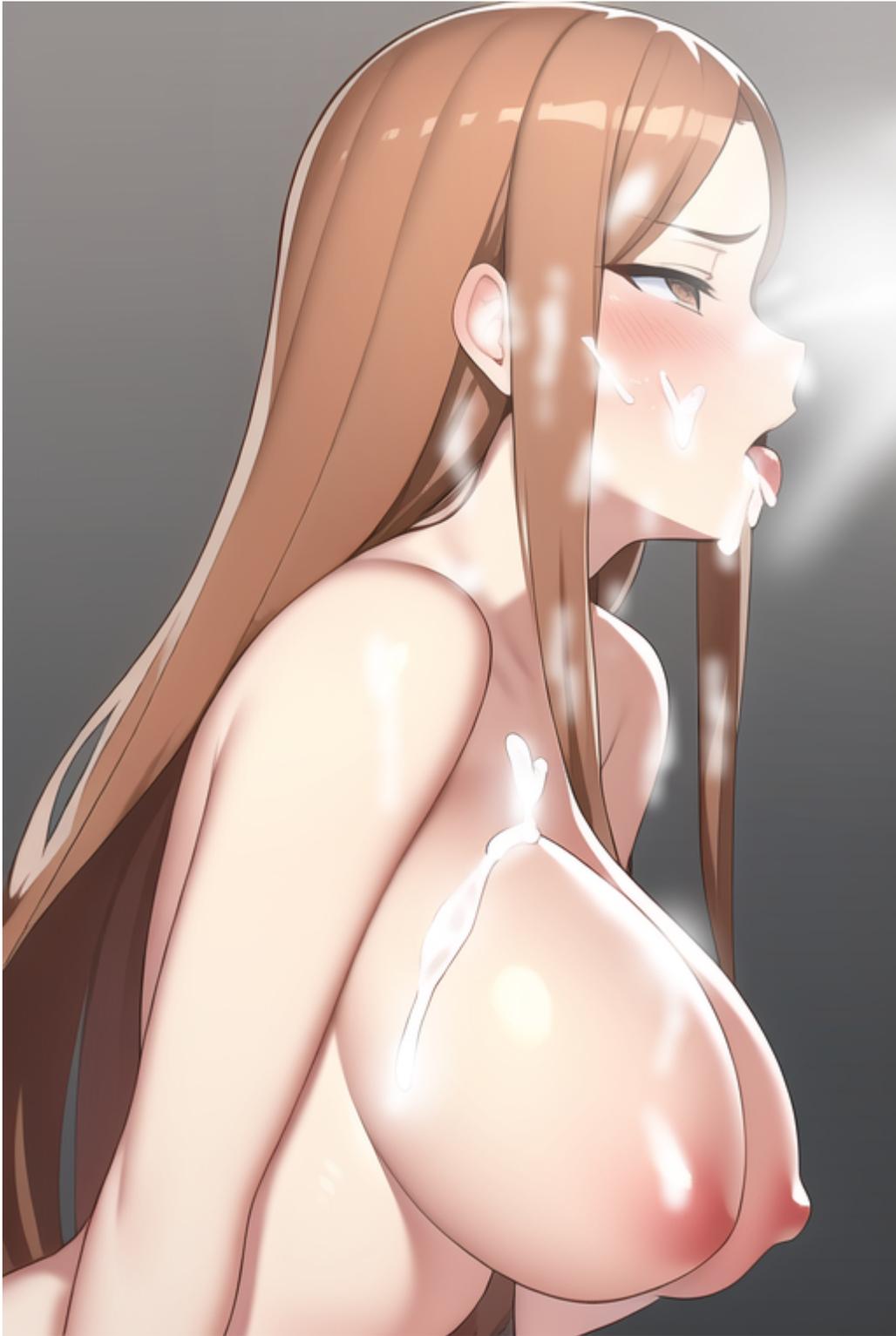
「え？これってどういうこと？」

RPGでよく見るウィンドウが表示され、ぼくはレベルアップとアイテムをゲットしたらしい。

そして.....マナが消えてしまったものの、ぼくのちんぽの射精はおさまることはなかった。

どぴゅううるるるるるるるるる♥♥♥

白い噴出はきれいな弧を描いて、女王さまの顔面にぶちまけられた。



「あひいいいいいッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥あついいいいいッ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

「「あ……」」」

サンプル版END 続きは本編でお楽しみください



「ひゃあああん♥♥♥精子きたああ♥♥♥♥♥♥♥♥ああ♥♥♥まだがんばります
♥♥♥♥♥♥♥♥精子きてるけど♥♥♥♥♥♥♥♥しごかなきゃ♥♥♥♥♥♥♥♥ご主人様のおち



「あら～かわいい子 came たわよ～」

「ほんとう♥ああでもすごいオスの匂いがするわあ♥」

「ふふんどんな男でもかまわないわよ！人間はみーんな犯しちゃうんだから♥」



「「ふふふ♥♥♥遊び人アスミ.....私たちふたりであなたを快樂地獄に送ってやる♥♥♥」」

同じセリフで爆乳を押し付け合いながら挑発してくるダブルフェリス。

お口から残っているそれを手に戻してみます。



白くて粘っこい液体が.....

「あああああああああああああ！！思い出しましたわ！！！」



シコシコシコシコシコ♥♥♥♥♥♥♥♥れろれろれろれおおおっ♥♥♥♥♥♥♥♥

「ぎゃあああああ！！止まんねええええええ！！やめてくれえええ！！
イっちまう！イっちまううううううう！！！」



「精子だせ♥♥♥アーちゃん♥♥♥♥♥♥いっばい子種汁出せ♥♥♥♥♥♥」
「いけいけ♥♥♥♥♥♥おにいちゃん♥♥♥イツちゃえええええ♥♥♥♥♥♥」

おまけ終わり

**この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件とは一切関係がありません。**

18歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

**無断転載・複製・複写・Web上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)
は禁止です。**

読者のみなさん、こんばんは～
ヘンタイ小説家のエロバトルンです。



作品を最後まで読んでいただき
ありがとうございました！

これからも、「凌辱」「復讐もの」「ざまあ」「敵女」
または、「男性受け」「おねショ●」「ふたなり」
などのジャンルを書いていきます。

よろしければ、フォローや
高評価、お気に入り登録で
応援していただけると
嬉しいです。

感想レビューで、好きな
ヒロインの名前やエロかった
シーンを教えてください！

twitterで情報更新中です。
こちらもフォローを
よろしくお願いします。



🔍 エロバトルン 検索

*ご注意CGのみAI生成を使用しています。